

# 戦場で銃撃戦

1868年、戊辰戦争における新政府軍の会津征討において、西園寺は越後口総督府の大参謀に任命された。西園寺の役割は錦旗を掲げて官軍の権威を示すことで、直接部隊を指揮することではなかった。なぜなら、官軍は各藩の兵で成り立っており、藩を超えた朝廷の権威で部隊の調和を保つ必要があったからだ。しかし、越後口での長岡藩との戦いは苦戦し、西園寺も新しく手に入れた鉄砲を使った長岡藩兵の激しい銃撃の中で、何度も危険を冒し、自ら銃を取って戦った。



# 親友の息子の世話を焼く

兆民の死後、その子ども丑吉が長い間、中国古代政治思想の研究のために北京で生活できたのは、西園寺が援助し、満鉄に頼んで囑託にしたからであった。西園寺から研究費をもらったとき、丑吉は「自分はこれを学問のために使うつもりだが、或いは社会運動に使うかもしれないがかまわないでしようか」と尋ねた。すると西園寺は「それはかまわない。が、あとの場合は、自分から出た金だということはいわないように」と答えた。これは丑吉の正直さと、西園寺の思想の寛容さがよくわかる話である。

兆民の死後、その子ども丑吉が長い間、中国古代政治思想の研究のために北京で生活できたのは、西園寺が援助し、満鉄に頼んで囑託にしたからであった。西園寺から研究費をもらったとき、丑吉は「自分はこれを学問のために使うつもりだが、或いは社会運動に使うかもしれないがかまわないでしようか」と尋ねた。すると西園寺は「それはかまわない。が、あとの場合は、自分から出た金だということはいわないように」と答えた。これは丑吉の正直さと、西園寺の思想の寛容さがよくわかる話である。

# 朝廷の異端児

西園寺が会津征討に行く前に参内したとき、洋服を着ていった。明治元年ごろ、一部の上流階級の男性は洋服を取り入れ始めていたが、まだ和服が一般的だった時代に、参内で洋服を着るのは前代未聞だった。それを見た年配の公家が、西園寺の膝のあたりまで近づいて「外国の服を着るのは、外国の制令を受けるに同じ」と非難した。すると西園寺は「自分は今から一年で朝廷の礼服も外国様となると信ずる。賭けをしましょう。私が誤りならば切腹しましょう。私の説があったらあなたはどうなさるか」と言った。相手は苦笑して引き下がったという。



# 命が狙われる中、料亭より食事を運ばせる



1936年の雪の夜に起きた二・二六事件は、西園寺が恐れていた過激な「国体観念」の爆発だった。事件の第一報を聞いたとき、静岡の興津にいた秘書の中川小十郎は、西園寺を車に乗せてすぐ静岡県警察部長官舎に避難させた。しかし西園寺は逃げ隠れるのを嫌い、一晩だけ泊まって興津の坐漁荘（西園寺の別荘）に戻った。美食家の西園寺は、警察部長官舎に避難したときに料亭「佐乃春」の食事を注文し、秘密に運ばせていたという。

参考資料：岩井忠熊(2003)『西園寺公望-最後の元老-』岩波書店、〈懐かしの立命館〉西園寺公望公と佐乃春の料理 <https://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html?id=144>

## 各種 SNS



立命館 史資料センター ホームページ  
<https://www.ritsumei.ac.jp/archives>



公式Facebook History Club 「and R」  
<https://www.facebook.com/historyritsumeikan>



公式YouTubeチャンネル  
<https://www.youtube.com/@user-RitsumeikanArchiveCenter>

本ニュースレターは、学園職員の方を対象に、少しでも学園の歴史に関心をもっていただくことを目的として発行した「インナーコミュニケーション」紙です。業務上「昔の立命館」のことを「知りたい」「気になる」とお感じになったら、ホームページやフェイスブックなども是非ご覧ください。または直接史資料センターにお問い合わせください。

清新 | 立命館 史資料センター ニュースレター 第5号 / 立命館創始155年・学園創立125周年記念

発行日：2025年9月1日 / 200部  
編集発行：立命館 史資料センターオフィス  
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学 西園寺記念館  
TEL. 075-465-8209 FAX. 075-465-7859

# 立命館 史資料 センター

RITSUMEIKAN  
ARCHIVES CENTER

私たちは何ものか。  
どこから来てどこへ行くのか。  
をわかりやすく

ひと足お先に

# 展覧会をのぞきみ!

立命館創立155年・学園創立125周年記念「西園寺公望の思想と立命館展」がまもなく開催されます。展覧会に先駆けて、西園寺公望をとりまく人びとと、その関係がうかがえる資料を少しだけご紹介します。

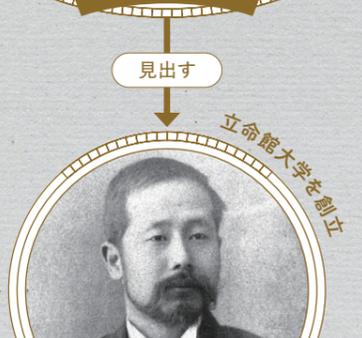
伊藤博文に見出されたことで、西園寺の人生は大きく動くこととなった。伊藤と西園寺は、秩序ある民衆の健全な発展こそが国家運営において欠かせないと考えていた点で共通点があったといえる。

西園寺は原に対して、「宮中のことは自分が引き受けるから、国務は君に任せる」と言い続けていた。1921年に東京駅で暗殺された。

フランス留学時代に出会う。お互いを高く評価していた。西園寺は世渡り下手な兆民のために、自宅の一室を提供して、自ら見つけてきた翻訳の仕事を紹介して働かせた。



## 西園寺公望をとりまく人びと



西園寺の弟であり、住友家15代当主。住友銀行の創設など、各種事業を拡大し住友財閥の発展に寄与。経済面で兄公望の志を支え続けた。

西園寺公望に見出され、文部大臣秘書官、京都帝国大学書記官(事務局長)に任命される。国家政策としては実現しなかった西園寺の教育思想は、中川に引き継がれ、政界から距離を置く京都の地で実現していた。

第2次伊藤内閣の文部大臣となり、学制改革、特に実業教育の振興を行おうとしたが、半年あまりで病気のため辞任。後任文相に西園寺公望が任命された。井上の教育政策は国体主義といわれ、西園寺の国際主義と対置されていた。

写真：伊藤博文/原敬/井上毅/中江兆民/住友友純  
出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」  
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

西園寺公望の  
思想と立命館展

2025年9月25日(木) - 10月6日(月)  
東京：丸善・丸の内本店4階ギャラリー  
〈時間〉9:00~21:00  
〈休館日〉なし 〈料金〉入場無料

2025年10月18日(土)  
京都：国立京都国際会館  
〈時間〉10:00~開場  
〈料金〉入場無料・要事前申込

お申し込み・詳細は▶  
立命館125周年特設サイト  
<https://www.ritsumei.ac.jp/125th-events/>



## 西園寺公望をとりまく人びとがわかる展示資料はこちら

伊藤博文追悼の句  
1909年



伊藤の立憲政友会創立に協力し、伊藤の後を承けて同党総裁に就任するなど、西園寺と伊藤は政治構想において深く通じるものがあった。本史料は、伊藤博文がハルビンで安重根に暗殺された直後、西園寺が追悼の意を込めて記した句であり、両者の深い関係性がうかがえる。



原敬宛西園寺公望書簡  
1914年5月16日



二度の首相を担当し、心身とも疲弊していた西園寺は、違勅問題と病気を理由に政友会総裁の辞任を願い出た。これは、西園寺が「政友会統率の任」を原敬に要請したことを伝える内容の書簡である。こうして西園寺は、政党政治の発展を原敬に託し、事実上政界を引退することとなる。

西園寺公自書履歴書  
1889年



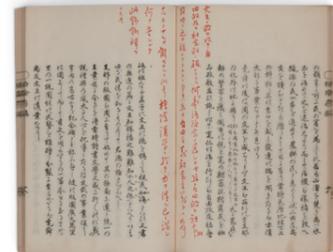
西園寺による、フランス帰国後の時期の履歴書である。彼は帰国後、パリで出会った自由民権派の松田正久や中江兆民が創刊した『東洋自由新聞』の社長となった。パリコミュンの実態を間近で体験し、民衆を育成することの重要性を理解した西園寺が、新聞を通じて自由民権派を秩序ある行動へと誘導しようとしたものとして理解できるだろう。



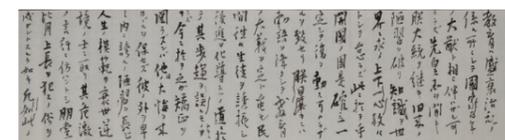
梧陰存稿への西園寺書き込み  
年不詳 6月4日



井上毅は自身の思想を、梧陰存稿としてまとめあげた。西園寺により書き込まれた内容は、井上の知識不足や論理矛盾を鋭く指摘するもので、西園寺が井上の思想に批判的であったことがうかがえる。井上は梧陰存稿で、中国古代の周の文王の統治をして、自由主義と社会主義の政治が始まったとする見解を示していた。それに対して西園寺は「自由主義、社会主義トハ如何ナルモノナルヤ解セサルニ似タリ」(現代訳：自由主義と社会主義がどのような政治思想なのかを井上毅は理解していない)と書き込んでいた。この書き込みからは、西園寺と井上の思想対立のみならず、西園寺の自由主義へのこだわりを読み取ることができる。



第二次教育勅語草案  
作成年不詳(西園寺文相期)



その原案の所在は長らく不明となっていたが、1990年代に入ってから、『西園寺公望伝』の編纂過程でその草案の素案と思われる本史料が発見された。日清戦後における国家主義の高まりに危機感を覚えた西園寺は、現行の教育勅語で示された方針が国民を排外主義的な方向に導いてしまっていると考え、この是正を試みたのである。結果実現はしなかったものの、西園寺文相期における目玉の改革構想として、研究者たちの注目を集めている。

京都大学創立ノ事情  
作成年不詳



西園寺文部大臣の秘書官だった中川小十郎は、京都帝国大学(現京都大学)の創立にあたり、書記官(事務局長)に任命された。本史料は後年、中川小十郎の伝記作成のために、関係者が当時の状況・沿革をまとめたもので、京都大学創立期の具体的な事情がうかがえる。



立命館法人組織発表式演説草稿  
1913(大正2)年



この中川小十郎による演説草稿では、教育の機会均等という私学の社会的役割を説くとともに、私立京都法政学校設立時に住友友純から金銭面での援助を受けたことが述べられる。住友は、法政学校が清輝楼から広小路へと移転する際、多額の寄附を行ったことで知られている。法政学校が「立命館大学」へと発展する過程には、西園寺家による多方面からの支援があったことがうかがえる。

